

# デンマークの福祉文化と 高齢者の社会参加活動

— ソウル市における事例との比較を通して —

奥山正司

はじめに

デンマークの社会福祉は、デンマークが国土も小さく、人口規模も小さいこともあって、日本ではスウェーデンと比較するとこれまであまり大きな話題にならなかった。しかし、福祉の理念につながるノーマライゼーションの原理は、デンマークが発祥の地である。

また、デンマークは、脱原発を果たした国家としても世界から注目されており、廃棄物処理も「廃棄物 21 (Affald 21)」という政策に基づいて行われており、リサイクル重視と環境問題への対応でも世界をリードしている (JETRO、2001)。

ここ 30 年の間では、同国のエネルギーの総消費量に対する自給率は 5% から 120% に、また、総消費量に占める再生可能エネルギーのシェアは 3% から 20% と劇的に伸びている (デンマーク・環境エネルギー省)。また、先進諸国では貧富の差が小さく、OECD 諸国の中では平等化が最も進んでいる国でもある<sup>1)</sup>

1) 「貧困率」とは、一般には、OECD の指標に基づく「相対的貧困率」を指しており、所得が国民の「平均値」の半分に満たない人の割合をいう。ここでの「平均値」とは、世帯の可処分所得を世帯人員数の平方根で割って調整した所得 (等価可処分所得) の中央値のことである。この 50% に達しない世帯員の割合が「相対的貧困率」である。

日本の貧困率は、国際比較でも高い割合である。OECD の統計によれば、2000 年代半ばの時点で OECD 加盟国 30 か国のうち、相対的貧困率が最も高かったのはメキシコ (約 18.5%)、次いで 2 番目がトルコ (約 17.5%)、3 番目が米国 (約 17%) で、4 番目に日本 (約 15%) となっている。貧困率が最も低かったのはデンマーク (約 5%) である。日本の相対的貧困率は、2000 年代中ごろから一貫して上昇傾向にあり、OECD の平均を上回っている。

一方、税や社会保障による所得再分配後の相対的貧困率について、1990 年代中頃以降の大まかな推移を見ると、一貫してアメリカが最も高く、デンマークが最も低い。日本は、継続的にアメリカに次いで高い値を示している。韓国は調査国の中で、最も貧困

(橋木俊詔、2006 及び OECD、2014)。

筆者は、デンマークへの福祉の視察を重ねるごとにそうした市民の生活と民主的な政治のあり方がデンマークの高齢者福祉を支えていることについて強く意識するようになった。すなわち、デンマーク人の民衆の力と政治の透明性が国民の政治への信頼性をうながし、デンマークの高齢者福祉を支えているように思えるのである。

本文は、2014年9月に訪問した2つの地域のヒヤリング調査に基づいている。一つ目は、コペンハーゲンの西方約30kmに位置するロスキレ市にある保育園、補助器具センター、社会・保健ヘルパー・アシスタント養成学校(SOSU)、プライエム(Plejhjem、日本の特別養護老人ホームにあたる)、プライエボリー(Plejobolig、介護型住宅)、エルダーボリー(aeldrebolig、高齢者住宅)を訪問しヒヤリングした内容である。二つ目は、コペンハーゲンの南に隣接し、日本からも毎日乗り入れている国際ハブ空港(Copenhagen Kastrup International Airport)があるドラゴー(Dragør)市の「高齢者の地域活動センター」を訪問し、ヒヤリングした内容である。上記の問題意識はこの二つの調査からことさらにその思いを強くした。

以下では、四つの視点や枠組みからデンマークの高齢者福祉を検討する。

その一つは、高齢者福祉が人生の後半である老年期(高齢期)だけではなく、むしろ出生後の幼児期からの生き方や親の育て方に見出すことができるのではないかと考えられた。もし、そうであるとしたら、高齢者福祉は、子育てや幼児教育など教育文化に深く根ざすものであり、そのバックボーンとなっているグルンドヴィの思想的背景や教育制度をも探る必要があると考えられる点である(奥山他、2009)。

二つ目には、平等意識や相互援助に裏打ちされた(支えられた)福祉政策、特に高齢者福祉政策がそれほど長くない期間のなかで整ってきたという経過を鑑みると、その福祉理念や福祉政策に照らし合わせて検討する必要があると考えられる点である。

三つ目は、長寿化した高齢期の生活をいかに充実したかたちで送っていくかと

---

率の高い国である。特に、韓国の高齢者の貧困率は、約5割に達しており、2世帯に1世帯が「貧困率」に属している。

ということが今日益々重要になってきており、それがデンマークにおける高齢者の生活にヒントが得られるのではないかと考えられる点である。かつて、筆者は、社会参加（活動）を、「インフォーマルな部門において、家族生活をこえた地域生活を基盤にして、同一の目的を有する人びとが自主的に参加し、集団で行っている活動」と定義したことがある（奥山、1986）。寝たきりの高齢者や認知症の高齢者等要介護高齢者の対応策もきわめて重要な課題であるが、高齢期を意味ある人生、生きがいのある生活をしていくことがそれと同等に重要であると考えられるのである。

さらに、四つ目として、補完的にデンマークにおける高齢者の地域への社会参加活動が韓国及び日本における高齢者の地域への社会参加活動と比較することによって、われわれが高齢期の生活をどのように送っていったらよいのかを考えられる点である。

分析の手順として、最初にグルンドヴィの思想的背景とデンマークにおける高齢者の地域での社会参加活動の実践（あり方）を述べる（前掲、2009）。後半のドラゴ市地域活動センターにおける高齢者の社会参加活動については、集团的志向が強い韓国（ソウル市）の事例及び日本（松戸市）の事例を取り上げ、それらと比較することによって、より具体的にデンマークの特徴を明らかにしたい。

## 1. グルンドヴィの思想的背景と公教育

近代デンマーク人の生活を語るとき、グルンドヴィ（N.F.S. Grundtvig）ほど重要な意味をもった人物は他にいないといわれる。彼は西洋諸国の「成人教育の父」となり、その理論は今日でも東欧諸国や発展途上国の民衆教育にも取り入れられるなど世界に広がっている。彼が寄与した領域は、哲学、神学、歴史学、政治理論、教育、そして高齢者福祉、民主主義等きわめて広範囲な分野に及び、デンマーク人のものの考え方、民主主義のあり方、教育のあり方を根底から規定しているといわれる。そうした教育文化やものの考え方、人生全体をとおしての生涯教育のあり方等は高齢期の生きかたとも深く関わっている。そこで彼の思想的背景や教育制度のひとつとして、フォルケホイスコーレ（Folkehøjskole）を紹介する。フォルケホイスコーレとは、デンマークに150年ほど前からはじまった

自由な学校である。当初、真の民主主義社会を実現するには、農民の教育が重要であると考えられ、彼は『生のための学校』（清水満、1993）を提唱したといわれる。それは、17歳半以上であれば、誰でも学ぶことができ、国家の干渉を受けない私立の学校である。国内では、100校を超え、現在ではデンマーク国内だけでなく、世界の国々に拡張している。一定の条件を満たし、国の認可がおりれば、国から運営費の85%の補助が受けられる。今日では、ペンシヨニスト（Pensionist）とよばれる年金受給者（主に高齢者）を対象とした「高齢者フォルケホイスコーレ」も全国5か所に設けられている。そこでは、高齢者の自由な生涯教育が泊り込み（2週間）で行われている。筆者は、デンマーク最南端のフォルスター（Falster）島に1971年に創設されたマリリスト（Marielist）高齢者フォルケホイスコーレに、1998年の夏に訪問し、21コースが設けられているなかのいくつかのコースに直接参加し、5日間高齢者と生活をともにすることができた。そこでは、高齢者は活き活きとした生涯教育を満喫していた。こうした自由の民衆教育を基礎にした全体の公教育体系は保育園から小学校を通して大学教育に至るまでのライフコース前半に影響しており、それが今日の子どもの生きかたや高齢者の生きかたにも多大な影響を及ぼしていると考えられる。

## 2. 高齢者福祉政策の推進されてきた経過

ところで、デンマークの高齢者福祉政策は、一朝一夕にして成立したのではなく、国民ひとりひとりの意識の高揚とそれを土台にした1979年の高齢者政策委員会等の力があってこそ実現したことはいうまでもない。

これまでの施設中心主義の反省から、高齢者は、「介護の対象」から「生活の主体者」として位置づけられ、「人生の継続性の尊重」「高齢者の自己決定の原則」「残存能力の活用」という高齢者福祉の3原則にそったかたちでの高齢者の生活の質が重要視されるようになった。そこでは、高齢者施設（プライエム）の建設が中止されるに至り、「住み慣れた居住地で生活すること」（Ageing in Place）をうたった高齢者への対応が最も重要な課題としてとりあげられるに至った。そのコンセプトは、①居住地とケアは分離すること、②近隣とコミュニティの変化を考慮すること、③高齢者の尊厳と自立を支援する環境にすること、④地域で居住

していく継続性を保持することの4つである。

こうしたデンマークの高齢者福祉政策は、日本の福祉国家モデルと比較するとまったく異なった次元での対応であり、徹底した普遍主義・平等主義の活用である。

その結果、プライエムや保護住宅は1987年の7.1%から2005年には2.3%まで減少し、逆に生活と介護を分離させた高齢者住宅が0.4%から7.5%まで増加し、高齢者の生活の中心となって増加していった。それは、日本の老人福祉施設全体の2.4%よりもはるかに大きく、老人保健施設の利用者数・在在者数(280589人)の1.1%を加えた3.5%よりも2倍以上高い。

### 3. 訪問した施設の状況

#### 総合保育園

保育教育には、決まったカリキュラムはなく、子ども達の自主性を重んじた遊びを保育の基本としている。デンマークでは、小さい時から自主性を尊重し「自己責任意識」を育てる教育が、学校で、また家庭生活の中でも重んじられている(個性の尊重と自己決定)。

訪れた総合保育園は、設立36年目、32名のスタッフで運営され、①乳児保育(0~3歳)、②幼児保育(3~6歳)、③統合保育(1~6歳)の3コースに、133名の園児が通園している。施設は閑静な住宅地の一面にあり、深い木立に囲まれ、緑豊かな広い敷地に、小さな丘や迷路があり、変化にとんだ遊びには恰好の環境である。

開園時間は朝6時30分から夕方5時30分まで、園児(0~6歳)は都合の良い時間にまちまちに登園し、保護者の迎え時間も自由である。朝早い開園は、共働きの家庭と企業の始業時間を考慮しているためである。

子どもは、大半の時間を広い園庭の好きな場所を選び好きなことをして、伸び伸びと遊んでいる。絵かき、絵本読み、ブランコ、木登り、自転車乗り、ロープ渡り、などなど、それぞれ自分のペースで飛びまわっている。

スタッフは、「見守り」を基本姿勢とし、子どもからの要請があるまで手を貸すことはしない。自由放任が高じて、事故につながるのではないかとの危惧に対し、

「子どもは体験の中から学んでいくので、小さな怪我は当たり前」と保護者からもコンセンサスを得ている。朝早く登園した子など、持参の弁当を早い時間帯に食べることも自由、(これも自己責任)、全員がそろって弁当を食べたり、また全員で昼寝するなど(但し、2歳児までは外気にさらし、昼寝をさせる)、同じ時間に、ひとつのことを一斉にやることは、ほとんどない。

保育の基本枠組み：管理的手法を極力排除し、自主性を尊重するゆとりある教育を重要視している。国民学校(9年制義務教育)においても、同様に個性を尊重する教育システムがとられている。子ども達は、遊びを通した体験のなかで「自主自立」と「自己責任」を身につけて行く。

### 補助器具センター

「高齢者や障害のある者が、ごく普通の生活が送れるよう、自立を支援するとともに、介護する人が楽に介護できるように」という理念を補助器具政策の基本としている(継続性の尊重、残存能力の活用)。

補助器具は、所得や家族構成に関係なく、全て無償貸与となっており、在宅ケアを支える柱の一つとして重要な位置をしめている。市センターには、車椅子、介助リフト、ベッドなどの大きなものから、食器類や包丁、爪切り、ヘアブラシなどの小さなものまで5,000種類の補助器具が用意されている。

補助器具の提供にあたり、作業療法士が、ニーズのある者へのヒヤリングにより、利用者の居住環境、日常の行動形態などを把握し、使い良い器具を選択する。さらに、利用者にあった規格に調整(微妙な違いまで身体に合わせて調整)のうえ提供する。また、同時にリハビリテーションなどによる機能回復、維持の可否をも判断し、必要な援助だけを提供する(残存能力の活用)。利用者の状況変化により不具合になった器具は回収して他の者に再利用するとともに、国内で不用になった器具は低開発国へ提供するなど、リサイクルにより資源の有効活用を図っている。

介護スタッフの労力軽減を考慮した各種補助器具(腰痛対策としてのリフトなど)も活用されている。豊富な種類と数多い補助器具に圧倒されるとともに、極めて細やかな対応に、福祉先進国の奥深さを感じた。

## 社会・保健ヘルパー・アシスタント養成学校（SOSU、ヘルパー・介護福祉士教育）

デンマークでは、教育全般について、多岐にわたる選択肢が用意されており、この養成学校では、生活費の支給を受けながら、自分の進路に合った職業教育を受けている。

学生の平均年齢は30歳、転職者が多く、90%が女性で、うち25%程度が移民の外国人（トルコ、パキスタン、ソマリアなどの国）である。入学資格は9年制のフォルケスコレ（公立小中学校）卒業者、もしくは20週間の社会保健基礎教育修了者となっている。また、人種、年齢、性別を問わず自由にテスト入学し教育内容を体験でき、その上で進路を決定することも可能（基礎教科と実習で10週間）である。教室では、体験入学の中高年男女が、国際色豊かに基礎教育を受講しており、ユニークな教育制度の一端に触れることができた。移民、難民の外国人は、3か年デンマーク語の教育を受けているので、実務上言葉の支障はない。

教育期間は①ヘルパー（社会保健介護助手）が1年2ヶ月 ②アシスタント（社会保健介護士）はヘルパー教育終了後1年8ヶ月で、実習教育に重点を置き、ヘルパー、アシスタントともに理論が3分の1、実習が3分の2の学習配分となっている。なお、アシスタント課程修了後、看護師、保健師、作業療法士、理学療法士、ソーシャルワーカー等の専門資格取得の道も開かれている（3か年の専門教育）。

学習の重点を実践的判断能力を養う問題解決型教育に置いている。また落ちこぼれがないように、実習指導員によるコンタクトパーソンシステムを取り入れている。

実習する学生（例えば、成人した平均年齢30歳の者）には、生活手当てとして、17,203 Dkr（1 Dkr 20円として、34万円）がロスキレ市から支給される。

## プライエム（日本の特別養護老人ホームに近い施設）

緑の多い広々とした敷地に瀟洒な建物が立ち並び、構内の一角には高齢者住宅が併設されている。建物中央の共用部分は吹き抜けで（ガラス屋根）、二階の回廊に面して、居室が配置されている。また、付属の施設を活用して、デイホームやリハビリコースも運営している。



男女 60 名が入居しており、スタッフは入居者 1 人に対し 0.78 人の体制となっている。居室は全て個室（リビング、寝室に、ミニキッチン、トイレ・シャワー付きの 33 m<sup>2</sup>の広さ）で、入居前の使い慣れた家具類等を持ち込み、自分のペースで自由に生活できる住環境を確保している（継続性の尊重）。

看護師、作業療法士、理学療法士が常勤しており、健康管理・指導、緊急時の対応などに当たっている。常時、SOSU からの学生が 2～3 名働いている。実習生（アシスタント）のピーアさんは 43 歳で元ドライブスクールの教師、4 歳と 17 歳の 2 児の母親である。

家族会や訪問の友（独り暮らしの高齢者を訪問し、インフォーマルなサービス〈傾聴、読書、散歩など〉を提供するボランティア活動団体）を通して、外部との交流が活発に行われている（継続の尊重、残存能力の活用）。また、施設を開放（児童水泳教室にプールを開放）し、地域住民との交流などに有効活用している。

入居は医師の診断書と判定委員会の評価（機能低下のみられる者やトラウマ（trauma）にかかった者に配慮し、居宅介護の可否につき判定）により認定する。原則 2 ヶ月以内での入居が規則で規定されているが、実務面では大変厳しい状況となっている。その他、問題点として、デンマークでも、マンパワー不足でゆとりのある介護ができず、ケアの質の低下が大きな悩みとなっている。

### 介護型住宅（プライエボーリ）

2005 年にオープン。広い敷地には 5 ブロック（1 ブロック 20 名）5 棟の独立棟と管理棟が整然と配置され、各棟は渡り廊下で結ばれている。木立に囲まれた各棟の広い中庭には芝生が敷きつめられ緑豊かで心の和むレイアウトで、四季の変化を体感できるように配慮されている。1 棟は認知症高齢者のグループホームである。

「住宅は福祉の基本」ともいわれるが、利便性を考慮し、入居者への思いが随所に生かされた快適な居住空間を形成している。日差しを取り入れる大きな窓、広い廊下、共用スペースのゆったりとした空間、個室は車椅子やその他補助器具を縦横に使用できる広い間取りで、特にトイレ・シャワー室は、介護スタッフが二人体制で介助できる十分なスペースを備えている。建物全体はもちろんバリアフリー仕様となっている。この住宅は高齢者福祉三原則を運営の基本としており、



随所にその基本精神を垣間見ることができた。

全体で、100名の高齢者が入居しており、女性が88%を占めている。

職員スタッフは入居者1人に対し約1人(0.958)でマンツーマンに近い体制が取られている。

住まいは賃貸形式で個室42㎡と共有部分20㎡(高齢者住宅法では共有部分を含めて1人部屋67㎡以下と定められている)から成り①個室はリビング、寝室、ミニキッチン、バス・トイレ②共有のコモンスペース(1棟に2ヶ所)は広いリビングにダイニングキッチンを備え入居者同志の交流の場となっている。昼下がりティータイム、共用のリビングでは複数の男女がテーブルを囲み談笑中であり、日当たりの良いソファのあるコーナーには、ひとりで寛いでいる男性の姿も見られた(自己決定)。

\*エディックさん(女性86歳)の部屋を訪問した。軽度の認知症で食事、入浴、移動等は介護者の指示もしくは介助によって行う。終始明るく、にこやかな対応から居住環境、人間関係に満足している様子を窺えた。テレビ、電話を備え、ベッド以外は自宅で使い馴染んだ家具類や絵画、装飾品などを持ち込み、住み慣れた居住空間を確保している。これらの生活環境の再現は身体、精神機能の維持に良好な結果をもたらしている(継続性の尊重、残存能力の活用)。家族の写真(息子さんやお孫さん)がテーブルや壁に飾られており、家族の強い絆を感じることができた。月に数回息子さん達の訪問があり、コミュニケーションも良くとれている。\*

スタッフは個々人の自主性と自立を尊重し、必要な場面以外では手助けはしない。保育教育でも触れたように、どの年齢層においても、自主性を尊重するコンセンサスがよく浸透している(自己決定)。

食事は半加工のものから加工済のものまでスタッフと入居者の話し合いで選択決定するが、野菜類の皮むきなどの軽作業は入居者が行う(自己決定、残存能力の活用)。

中庭を散歩中の老人が目にとまった。生業は元肉屋さんで、現役中は朝4時起床の生活、現在も同じペースでの起床と早朝散歩を日課にしているとのことで、職員はその行動を静かに見守っているとのことであった(自己決定、継続性の尊重、残存能力の活用)。

移動図書館も定期的に巡回しており、文化活動を側面から支援している（残存能力の活用）。

入居者は、この住宅を「終のすみか」として考え、大半の者は「ホスピタルで死を迎えたくない、ここが自分の死に場所」と決めており、最終の対応（看取り）は本人との話合いで決めている。

入居に当たっては判定委員会の認証が必要である。もちろん、入居は本人の意思決定による（自己決定）。2009年1月からは原則最大2か月待ちの通達となっている。

### ドラゴ市の高齢者地域活動センター

地域活動センターでは、ピエールさん（銀行員でかつ市議会議員）と運営委員のベンテさん（高齢女性のパーティクイーン）にヒヤリングする。以下、彼らからのヒヤリング内容である。

ドラゴの町は、首都コペンハーゲンから約16キロのところに位置する港町である。先に述べた国際空港のそばにあるが、昔の街並みが残っており、小舟で漁をする人もいる港町である。2014年現在、人口14,000人の町である。65歳以上人口は約18%の2,600人である。市議会議員は15名で、全員が無給である。ヒヤリングした他の数人からも共通した言葉として、ドラゴは、デンマークの中でも一番幸せな町ではないかという。この高齢者地域活動センターは、2014年11月16日で25周年になるといい、高齢者住宅（46件）と若い世帯向け住宅（10件）も併設している。この建物は、以前は繊維工場であった。住宅にする前には11室のショートステイ（高齢者住宅待ちの人の施設）があったが、そこに住んでいた人たちは全員高齢者施設（イーゴーに117室ある）へ移って行った。そこで、高齢者の市民が中心となって高齢者地域活動センターを創設した（写真）。その場所は車道から直接入れるし、食堂などもあり、町の住民が利用できるカフェもある。ただ若い人はあまり来ないという。また、高齢者地域活動センターは、市の中心部にあり、多くの部屋とプログラムが用意されている。また工場の跡地は、今は、アクティビティ活動や指物（さしもの）用の部屋として、大工や工芸ができるようになっている。

面接時、丁度食堂では、卓球グループの指導者（元飛行機の機長だった84歳の



高齢者の地域活動センター（ドラゴー市）

人)のお誕生会のお祝いをしていた。

活動は全部で約100種類くらいあり、すべてボランティアの人が運営しているので地域活動センターの担当者は、市の職員のハンナさん1人のみである。ボランティア同士はネットワークができていて、自分で時間管理もしている。年4回、機関誌を出版しており、全てこの場所を利用している高齢者が印刷している。ボランティアの人への報酬は3時間程度でコーヒー1杯くらいの支払いであり、6時間で2杯分位とのことである。きわめて安価であるが、それでもすすんで来る人がいるとのことであった。

利用者は障害年金や年金をもらっている人及び早期退職者であり、約 800 人が登録している。一日平均約 100 人～200 人が利用している。活動には女性の参加者が多い、男性は家からここに出てくるのはなかなか難しいと言っており、この点は日本の事情とよく似ている。男性は引っぱり出さないといけないという。

費用は、半年間毎に、参加者は 415 dkr (デンマーク・クローネ) を払う。市は 250 万 dkr (年間) を支出しているが、半分は人件費である。ピエールさんは「この運営は市の投資としては一番良い政策だと思っている」という。

利用者委員会 (うち、1 名は市議会議員) で運営されている。委員会は 8 名で構成され、プログラムの種目や活動リーダーは立候補制で、委員会に認められ、活動は自己申請で始まる。時には利用者委員会がスポットで催す講演会やパーティ等も行われる。

運営は、ボランティアによってほとんどのことが行われているが、食堂のカフェは外部の会社が受注して運営している (自営)。

高齢者地域活動センターの中には、高齢者のための様々なマシーンや平行棒もおいてある。自分でトレーニングをすることもできるが、週に何日かは理学療法士が定期的に来ており、リハビリの訓練施設にもなっている。

活動プログラム (Dragørs Aktivitethus) は、50～60 種類ほどが用意されており、一週間で約 1,000 人が利用している。下図は、その活動内容である。

ドラゴ活動センターのプログラム (2014 年 9 月 現在)

AKTIVITET (デンマーク語)	活動 (日本語)
<u>AL-sang</u>	歌の会
<u>Bibliotek</u>	図書
<u>Billard</u>	ビリヤード
<u>Bel Canto</u>	ベルカント呼吸法
<u>Bodypump</u>	筋トレ
<u>Bodystep</u>	ボディーステップ
<u>Bogbinding</u>	装丁
<u>Bordtennis</u>	卓球

デンマークの福祉文化と高齢者の社会参加活動

<u>Boldøvelse</u>	ボール体操
<u>Bridge</u>	ブリッジ
<u>Brodeuserne</u>	刺繍
<u>Decoupage</u>	デコパージュ
<u>Digital foto</u>	デジタルフォット
<u>EDB</u>	コンピューター
<u>Engelsk</u>	英語
<u>FitVibe</u>	Tread mill
<u>FitVibe</u>	Accelation training
<u>Fletteri</u>	かご網
<u>Fransk</u>	フランス語
<u>Frimærker</u>	切手
<u>iPad</u>	iPad
<u>Harmonika</u>	アコーディオン
<u>Havegruppe</u>	ガーデングループ
<u>Herregymnastik</u>	男性用体操
<u>Hørenetværk</u>	聴覚ネットワーク
<u>IT-workshop</u>	IT-ワークショップ
<u>Klaver</u>	ピアノ
<u>Krimiklubben</u>	推理小説読書会
<u>Kvindekreds samf. &amp; os</u>	女子会 社会と私達
<u>Les Lanciers</u>	ダンスグループ
<u>L'hombre</u>	トランプ
<u>Maling / tegning</u>	絵画
<u>Metalværksted</u>	メタル工房
<u>Moderne dans</u>	モダンダンス
<u>Mosaik</u>	モザイク
<u>Motion</u>	運動
<u>Noder, rytmer og toner</u>	楽譜、リズム、トーン

<u>Patchwork</u>	パッチワーク
<u>Petanque</u>	ペタン
<u>Pladehylden</u>	LP レコード鑑賞
<u>Poker</u>	ポーカー
<u>Qi gong</u>	太極拳
<u>Rejseklubben</u>	旅行クラブ
<u>Selvtræning efter pgr.</u>	自主トレ
<u>Selvtræning</u>	自主トレ
<u>Skak</u>	チェス
<u>Skrivegruppen</u>	執筆グループ
<u>Slægtsforskning</u>	家系図調査
<u>Spansk konservation</u>	スペイン語
<u>Stenslibning</u>	研磨
<u>Strikkeriet</u>	編み物
<u>Studiekreds samfundet</u>	社会勉強会
<u>Livets mening</u>	生きる意味
<u>Syning</u>	縫い物
<u>Sy, strik, rep</u>	縫う、編む、修理の会
<u>Tablets</u>	タブレット
<u>Træværksted</u>	木工
<u>Videogruppen</u>	ビデオグループ
<u>Whist</u>	トランプ
<u>Yoga</u>	ヨガ
<u>Zumba</u>	サンバ
<u>3D Kort</u>	トランプ

出典：「地域活動センターの案内」より筆者作成



高齢者地域活動センターの受付（ドラゴ市）

訪問当日は、地域活動センターの受付に2名のボランティアが座っていた（写真）。またホールでは体操と太極拳をしており、2階ではペインティングもしていた。何か所かにおいてあったテレビでは、自分たちで作成した地域活動センターの紹介プログラムの映像が放映されていた。

ヒヤリングによると、町のいろいろな情報は、全てインターネットから送信されてくるとのことである。現在、ITを教えるIパットグループがあり、参加者が増えているとのことである。当初6人で始めていたが、現在は2グループになっているとのことである。インターネットを使用している高齢者に分からないことがあれば、ここに来れば何でも教えてもらえるので、自治体とタイアップした施設としてはとても便利であるという。

デンマークの高齢者は生きがいを見出しているかといえば、本人が若い時から楽しみとしている活動の中に見出しているとのことである。そのため、高齢者になっても若いときから継続して地域活動に参加しており、いろいろな楽しみを持っている人が多い（労働組合が組織しているAOF、FOF等の成人のカルチャースクールがあり、若い時から参加している者が多い）。



ボランティア活動が盛んな理由を尋ねてみたが、「デンマークでは、若い時から生活を楽しむ習慣があり、かつ、年金が充実しており、経済面の心配が無いので、ボランティア活動が盛んになるのでしょう」ということであつた。

孤独死については、小さい町なのでほとんどないということであつた。また、赤十字やボランティアの人々が家庭訪問をしており、自治体では、75歳以上の人を家庭訪問しているということであつた。

#### 4. ソウル市における高齢者の社会参加活動と老人福祉センターの役割

これまで、デンマークの高齢者福祉に関わる教育文化・思想及び高齢者福祉の現場での実践活動や地域活動センターにおける高齢者の社会参加活動について紹介してきた。

以下では、デンマークと対照的な韓国（ソウル市）での高齢者の社会参加活動と老人福祉センターの果たしている役割を補完的に述べることにする。また日本についてもその一例として千葉県松戸市の事例について掲載することにする。それがデンマークにおける高齢者の地域活動と地域活動センターをより浮き彫りにできると考えられたからである。

ところで、韓国では、高齢者への敬老精神や高齢者（老親）と子ども家族との関わりは、現在でも日本以上に深く根強い社会である。また依然として近代化の道を歩み続けているが、その一方では儒教思想が急速に衰退しつつある（奥山、2014）。

こうした状況の中で、韓国高齢者の貧困率は、日本の19.4%に対して49.6%に達しており、OECD加入国平均（11.0%）の3倍をはるかに超えている（OECD、2014）。また高齢者の自殺率（人口10万人対）も、かつて世界で最も高いと言われていた日本人高齢者（75歳以上）の14.6に対し、韓国では81.9と群を抜いて高い割合となっている（OECD、2011）。こうした統計資料からみ限り、韓国の高齢者は、決して恵まれた環境のなかで生活しているとは言い難い。

では、韓国における高齢者の社会参加活動の一旦として、ソウル市での老人福祉センターの活動状況は、どのような状況なのかを明らかにしたい。

対象施設は、ソウル市内における以下の三つの老人福祉センターである。

- a ソウル老人福祉総合センター（鐘路区仁寺洞）
- b 鐘路老人福祉総合センター（鐘路区梨花洞）
- c 万背老人福祉総合センター（端草区万背）

対象施設をソウル市内の老人福祉センターに限定した理由は、各々の区で老人福祉会館（センター）を公費で設置しており、それがデンマークの民間主導型とは異なっていること、また高齢者の社会参加活動のプログラムが日本より豊富に構成されていることによる。したがって、老人福祉センターはソウル市民の高齢者が気軽に利用できる状態となっている。

ところで、ソウル市内は、漢江（ハンガン）を境にして、旧市内（江北・カンボク）と新市内（江南・カンナム）に大別される。三つの対象地域のうち、上の二つは、旧市内に位置しており、下の万背老人福祉総合センターは新市内に位置している。

### 老人福祉センターの社会参加活動とプログラムの内容構成

韓国ソウル市の老人福祉総合センターは、一日2千人から3千人の高齢者が利用しており、利用率のきわめて高い福祉総合施設となっている。

江南に位置する「端草区万背老人福祉総合センター」は、旧市内（江北）にある2つの老人福祉センターと同様、ソウル市では、公設民営のかたちで運営されている。したがって、3つの老人福祉センターはほとんど同じ内容のプログラムを構成している。以下では、端草区万背老人福祉センターがどのようなプログラムをつくり、高齢者の社会参加活動に供与しているのかを、施設長からのヒヤリング及び広報の資料から紹介する。

#### 〈プログラム内容〉

1. 相談事業 2. 社会教育 3. 在宅福祉サービス 4. 地域福祉サービス 5. 医療リハビリ 6. 福利厚生 7. 敬老堂活性化事業 8. デイサービス事業 9. 就労斡旋 10. 予防事業・広報事業 11. ボランティアの案内 12. 老人虐待防止事業 13. 認知症への支援事業などきわめて多岐にわたっている。

#### 〈職員〉

常勤職員は、以下の構成から成り立っている。

館長 1、部長 1、課長 1、チーム長 2、社会福祉士 9、会計 1、安全管理 1、事務員 2、栄養士 1、PT（理学療法士）1、調理師 1、看護師 1、委託医 1 計 23 人

この他、月曜日から金曜日まで、非常勤職員とボランティアが毎日、200 人程度参加している。特に、昼食時には、多くのボランティアが活躍している。

#### 〈社会教育事業プログラム〉

老人福祉総合センターは、多様な教養・文化・余暇活動を通じて高齢者のいきがいがあって健康な老後生活を追求し、地域社会で尊敬される高齢者でかつ品位が向上するように支援することを目的としている。数あるサービス内容の中で、社会教育事業が最も人気があり、活発であることから多くの高齢者が利用している。その内容を具体的に紹介する。

#### 《費用》

社会教育受講申請時月 10,000 ウォン納付（最大 3 科目申請可能）

コンピューター科目別途：受講申請時月 15,000 ウォン納付

（コンピューター科目の場合、能力別講義実施：昇級テスト実施）

#### 《社会教育事業プログラム内容》

- ・教養：孫に教える ABC、英語中級、英会話、東洋哲学、文芸創作、中国語初歩、中国語中級、中国語会話、ハングルカナダラ、ハングル下敷組、千字文、四字小學、明心宝鑑、日本語初歩、日本語中級、日本語会話、日本の歌、歴史教室
- ・文化：手話教室、童話口演、手指針教室、ハングル書道、漢文書道、四君子、東洋画、囲碁基礎、囲碁中級、紙の工芸、生活陶芸、足のマッサージ
- ・体育：石臼体操、丹田呼吸、ベリーダンス、エアロビック
- ・舞踊：韓国舞踊、民俗踊り体操、ダンススポーツ、フォークダンス、ポップソングダンス
- ・音楽：歌の教室、民謡教室、歌曲教室、アコーディオン、風物教室、ギター、ハーモニカ
- ・余暇：ピンポン教室、ビリヤード教室、将棋囲碁教室、青春カラオケ
- ・コンピューター：文書作成、インターネット基礎、インターネット活用、スライド PTT、カフェ&ブログ、ミニホームページ、ITQ ハングル、ITQ インターネット
- ・特別行事：役員定期総会、作品発表会、年末行事、サークルサポート及び管理、

外部大会参加、新入会員の適応管理、子供と一緒にの行事、外国ドラマの上映及び映画感想、満足度の調査など。

## 要約と課題

これまで、主にデンマークの高齢者福祉に関わる教育文化と高齢者の地域参加活動及び韓国（ソウル市）での老人福祉センターにおける活動プログラム（構成）や高齢者の活動状況等についてヒヤリングした内容を紹介してきた。ここでは、さらに日本（松戸市）の事例を掲載することによって、高齢者の地域参加活動についての課題や展望を述べることにしたい。

まず、高齢者の社会参加活動（地域参加活動）について、日本の事例を加えた3つの国（市）を比較してみると、デンマーク・韓国・日本の高齢者の社会参加活動のタイプは、次の表のように分類される。

それによれば、デンマークは、「市民参加型」といってもよいような自主的な活動の上に高齢者の社会参加活動は成り立っている。費用においてもほとんどすべてが自前であり、ボランティア活動が中心である。事業名も高齢者の自主的な「地域活動委員会」が組織し、運営している。

韓国は、行政と宗教法人の協働型といわれる「公設民営」型で成り立っており、事業者は「曹溪寺生涯センター」の宗教法人が行っている。高齢者の社会参加活動者数（利用者数）は一日数千人を擁しており、大規模な組織活動として成り立っている。また、昼食時は、多くのボランティアを活用し、より安価な食事を提供して、参加しやすい状況をつくっている。こうした事情は、韓国高齢者の集団志向はもとより、前述した経済的な生活状況が大きく反映しているように思われる。

一方、日本では、1963年の「老人福祉法」施行時に「老人クラブ」が発足し、地域を基盤にした高齢者の社会参加活動が旧厚生省指導の下で行われてきた。しかし、旧態依然の地域でのこうした高齢者の地域参加活動は大都市地域を中心に著しく減少し続けている。特に東京都のような大都市地域での高齢者（60歳以上）の加入率は2割以下に減少してきており、今日に至っている。

それに代わって、文部科学省が管轄している「生涯大学」という高齢者の社会

参加活動が大都市地域を中心に活発化してきている。その理由は、参加者の自由と自主活動及び創造的な活動をより重んじていることから、利用している高齢者は相対的に学歴が高く、自主性に富んでいる人たちとなっている。それは、一見、「行政主導型」ではあるが、高齢者の社会参加活動がより主体的な活動として定着している。

これまで述べてきたように、デンマーク、日本、韓国の3か国における高齢者の社会参加活動については、事例としてとりあげた地域活動センター、生涯大学、老人福祉センターをタイプ別にみると、それぞれ「市民参加型」「行政指導型」「公設民営型」に分類することができた。

では、このような3つの国(市)の状況から、日本の高齢者の社会参加活動(地域参加活動)を積極的に推進していくためにはどのようなことが考えられるであろうか。千葉県松戸市や東京都の例を参考にしながらみしてみる。

理想的には、デンマークのような自主的な活動ができる高齢者の地域活動が望ましいことは言うまでもない。しかし、それは一朝一夕にして実現するものではない。むしろ、日本の大都市地域では地域社会の相互扶助や支援態勢は希薄になってきており、特に地域での高齢者への見守り体制が弱体化してきているのが現状である。こうした現実を踏まえ、地域社会をこれまで以上に活性化させるためには、団塊の世代をはじめ、活動的な高齢者が地域社会の新しい担い手となって、地域社会の再生のために積極的に取り組むことが期待される。

そのための課題や方策はどのような具体策が考えられるのか。東京都の報告によれば、団塊世代の男性に急に社会貢献や地域での活動をきかしても難しいといわれる。まず、興味のあることから始め、地域を知ってもらう、地域で生活しているという実感を持ってもらうことが必要であるという。

一方、高齢者が地域活動に関わるとき、自分が何をしたいのか、ある程度決めておくことも必要であり、それによって、地域への活動へ円滑に移行し、活動の継続性が図られるという。さらには、気軽に地域活動に参加することも必要であるという。

また地域活動を円滑に活性化させるためには、コーディネートする高齢者の人材育成が求められており、地域活動と人材をつなぐための人材が必要である。

他方、地域活動に興味を持っている高齢者が実際の地域活動に結びついていな

表 高齢者の社会参加活動のタイプと活動内容（日本・デンマーク・韓国）

タイプ別	市民参加型	行政主導型	公設民営型 (行政・宗教法人 協働型)
国名	デンマーク	日本	大韓民国
調査都市名	ドラゴ市 (首都コペンハーゲン の南隣)	松戸市	ソウル市特別区 (江南、江北)
総人口 (高齢化率)	1.4 万人 (約 18%)	48.4 万人 (20%)	1,200 万人 (約 15%)
一日の 利用者数	100 人～200 人 (登録者 800 人)	コースにより 異なる	約 1,000 人～3,000 人
利用プロ グラム数	約 60 コース	4 コース	約 60 コース
利用料	1 人 450 dkr (6 か月間)	1 万 5,000 円 (年間)	基本的に無料 (リハビリ器具等は 一部有料)
サポート 体制	ボランティア中心 (専任は公務員 1 人のみ)	行政担当者	専任職員 10 数人と ボランティア多数
食事 (その他)	館内レストランの 利用	弁当注文 又は持参	2014 年末から有料 (昼食は日本円で 約 100 円)
利用圏域	市民	松戸市民及び隣接市民	ソウル市民 (江南、江北)
事業名	地域活動委員会	生涯大学 (文部科学省及び県)	曹溪寺生涯センター

データは、各国とも 2014 年 筆者作成

いという現実があるため、これを結びつけるマッチング機能が必要である。そのためには、気楽に相談できる「コーディネーター」や「インターネット機能」の活用が必要である。

価値観が多様化する中で、高齢者の社会参加活動や学習活動を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められるとともに、社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされるといえる。

このため、高齢者を含めた全ての人々が、生涯にわたって学習活動を行うことができるよう、学校や地域社会における多様な学習機会の提供を図るとともに、その成果の適切な評価の促進を図る必要がある。

本稿は、2014年度東京経済大学共同研究助成費（B14-02）の助成を受けて実施した研究成果の一部である。記して謝意を表したい。

#### 〈参考文献〉

- 清水満『生のための学校』新評論、1993年  
JETRO（日本貿易振興機構）「ユーロトレンド」No. 06, 2001年2月号  
OECD (2014) Family database  
橋木俊詔『格差社会』岩波新書、2006年  
広井良典『持続可能な福祉社会』ちくま新書、2006年  
厚生労働省『国勢調査』、『住民基本台帳』及び『社会福祉施設調査』  
内閣府「社会参加活動の促進」 | 平成25年版高齢社会白書（全体版）  
Denmark: statistical year book 2005  
OECD, Society at a Glance1 (2011)  
奥山正司、菅原國恭「デンマーク人の生き方と高齢者福祉」（海外高齢者事情—③長生きを喜べる国へ）『長寿社会グローバル・インフォメーション・ジャーナル Vol. 11』2009年、pp. 12-17  
奥山正司「高齢者の社会参加とコミュニティづくり」『社会老年学』No. 24、東京大学出版会、1986年、pp. 67-82  
奥山正司「家族介護者の介護負担及び介護規模意識に関する日韓比較研究—東京都及びソウル市における要介護高齢者の調査研究を通して—」『現代法学』No3、



東京経済大学現代法学会、2002年、pp. 105-125

奥山正司「韓国・ソウル市における高齢者の社会参加活動—老人福祉センター及びタ  
プル公園における活動状況—」十文字学園・少子高齢人口減少社会生活研究所  
紀要『コルヌイエ』16号、別冊、2014年、pp. 5-11

ソウル市端草区万背老人福祉センター『端草区立万背老人総合福祉センター』（リー  
フレット）2014年

[www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/.../20090327siryo2.pdf](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/.../20090327siryo2.pdf) 東京都福祉保健局  
『「団塊世代・元気高齢者地域活性化推進協議会」中間のまとめ』2009年